

『13-14 世紀転換期イタリア半島における預言者の研究』

白川太郎

後期中世の西方キリスト教世界（特に地中海沿岸地域）では、幻視・脱魂などの神秘体験によって周囲から「聖人」とみなされ、カリスマ的な権威を帯びた信徒たちが広範囲に出現し、信仰生活において大きな役割を果たした。彼らの周囲には、その「聖性」を慕う信徒が集まり、緩やかな崇敬サークルが形成された。その「聖性の評判 *Fama sanctitatis*」は、時には彼らの死後にも継続し、地域的な聖人崇敬へと発展していった。こうした特異な人々を、本論文では「預言者」と呼称する。

本論文の目的は、これらの預言者たちの活動および彼らに対する崇敬の実態を解明し、それによって後期中世のキリスト教史研究全体に新たな分析枠を提示することにある。そのため、本論文では、後期中世において進行した規律化・司牧革命との関係を、分析における補助線として導入する。また、研究の方法としては、従来の研究が「靈性」をはじめとする内面的領域を実体化して特権視してきたことを批判し、人的結合・実践・表象に着目する方法をとる。対象地域としては預言者の活動が最も大規模に記録されているイタリア半島北中部を、時期としては預言者の出現期にあたる 13-14 世紀の転換期を設定する。中心的な分析対象とした預言者は、ドルチーノ・ダ・ノヴァーラ、マイフレダ・ダ・ピローヴァノ、キアラ・ダ・モンテファルコ、マルゲリータ・ダ・コルトーナの 4 名である。

従来の研究は、預言者たちが活動した後期中世イタリア半島のキリスト教文化を、何らかの対立項に基づく図式によって把握してきた。古典的な宗教運動論は「聖職位階制教会と俗人・民衆の靈性」の二項対立を設定し、13 世紀末から 14 世紀初頭には前者による後者の抑圧が完成すると主張してきた。それに対して 20 世紀末以降の研究は、靈性・心性・構造への注目を離れて社会史的視点や表象分析の手法を導入し、さらに従来は軽視されてきた領域を開拓することで、古典的枠組の克服を試みてきた。しかし、研究領域や手法の細分化・専門化、女性史の影響等の結果として、「聖人」・「異端者」・女性やそれと関連する司牧・異端審問など伝統的な主題において、二項対立的・目的論的な図式が未だ強固に残っている。その結果として、後期中世イタリア半島のキリスト教全体を捉えるためのパラダイムは、未だ更新されていない。

本論文が預言者と呼ぶ信徒たちは、こうした歴史像の中心に位置している。先行研究は、13 世紀後半における預言者の出現を、①公的空間から排除されつつあった俗人・女性による内面への逃避ないし抵抗の産物、②聖職位階制教会の合理的・制度的な信仰形態への対抗文化・オルタナティブ、③規律化を推進する司牧者＝聖職位階制教会によって構築・統制される客体などとみなしてきた。いずれの視点に立っても、預言者と彼らに対する崇敬は、聖職位階制教会に対立する何らかの主体・対象と考えられている。こうした預言者・預言者崇敬の歴史的・史学史的な重要性を踏まえて、本論文の最終的な目標は、預言者という問題系の検証を通じて後期中世のキリスト教文化全体に対する歴史学的研究を刷新し、新しい分析の枠組を提示することにある。

本論文は、以下の 4 点を目標・論点として設定する。第一に、預言者の出現・活動および彼らに対する崇敬を地域史的的手法によって再検討し、崇敬の社会的役割を機能的側面から解明すること。第二に、生前の預言者を取り巻いていた人的結合の実態を検証し、その「聖性の評判」およ

び彼らへの敵意の身分・社会集団・性差の境界線を超えた広まりを指摘すること。第三に、生前の預言者と崇敬者による信仰実践を分析し、彼らによる制度的な秘蹟・司牧の模倣・複製を明らかにすること。第四に、預言者の死の直後に作成された同時代の表象史料の内容・形式とそこで用いられた修辭的戦略を解説し、預言・預言者の「カリスマ的」権威が同時代の言説空間において占めた位置を特定することである。

本論文の内容と構成は以下の通りである。

第1部では、個別研究が位置づけられる歴史的状況・文脈をあらかじめ整理して提示した。

第1章では、預言者崇敬をはじめとする後期中世の信仰文化全体の土壌として、後期古代から13世紀初頭へ至るイタリア半島北中部の信仰文化史を、①在俗教会組織の成立と展開、②宗教的な権威と指導者の類型という観点から概観した。①イタリア半島北中部において、共同体と空間を編成する基本的な単位は司教区および教区であった。また、聖俗の基本的な生活単位の間にならぎが生じたため、都市共同体が信仰文化を規定する重要な場・枠組となり、12-13世紀には「市民的宗教」が各地で実践されていった。しかし、古典的な司教区=教区システムは、12世紀後半以来の人口増加や空間編成の変容によって、少しずつ機能不全を起こすようになっていた。第2章で論じる「新しい修道生活」や第3章で扱う司牧革命、そして預言者の出現は、いずれも在俗教会組織による司牧・秘蹟システムの動揺に対する反応という側面を有している。②13世紀までのイタリア半島において、聖職位階制教会外部の権威として認められていたのは、「聖人」と「預言者」であった。前者は「キリストへの追隨／使徒的生活」といった信徒の理想を基準とするカテゴリーであり、殉教者・修道者によって体現された。後者は靈的知解として定義された「預言」概念に基づいて、真理の認識者として観念された。ただし、ジョアッキーノ主義の広まりによって、未来予告者としての預言者認識も残存した。いずれの類型も、後期中世イタリア半島における預言者たちの活動や周囲の信徒によるその認識・表象に大きな影響を与えることになる。

第2章では、預言者崇敬を育んだ直接の土壌として、13世紀以降のイタリア半島北中部一帯に広まった「新しい修道生活 *Religiones novae*」を扱った。12-13世紀転換期のイタリア半島北中部諸都市では、上述のとおり司教区=教区の枠組が機能不全に陥りつつあった。また、都市社会におけるリテラシーの向上は、俗人による聖書へのアクセス可能性を高め、それまで修道生活によって独占されていた「キリストへの追隨／使徒的生活」という靈的資本の領有を可能とした。このようにして、13世紀初頭には都市の中上層に位置する人々が自らの主体性を発揮する要件ないし必要性が整った。その結果として、この時期以降には、俗人信徒による半ば自立的な信仰実践が活発化した。多くの信徒が回心を宣言し、俗世との絆を象徴的に断ち切り、都市内外での隠修・籠居生活に入って、寄進によって生活した。それに加えて、自分の家に住んで俗世的活動を続けながらも苦行や慈善活動に従事し、時には巡礼・十字軍に参加する信徒たちも出現した。ある者は共同生活を営み、ある者は独居を選んだ。ただし、一連の新しい生活形態・実践は、信徒たちの信仰実践は、福音書に描かれた人の子と使徒の生活の直接的な模倣を希求していたとしても、実際には「修道制の靈的資本の領有」として現出した。本論文の対象である預言者とその崇敬者たちの多くが、この「新しい修道生活」の従事者であった。

第3章では、預言者の活動や彼らに対する崇敬にとっての重要な外的条件として、聖職位階制教会が推進した司牧革命の諸相を検討した。13世紀から16世紀半ばにかけて、ローマ教会の原理的指導者である教皇権とそれを支える学識者集団は、①「正統信仰」の明確化、②「キリスト教の内面化」、③地域的に多様な信仰文化の均質化、④教皇を頂点とする聖職位階制教会による信

仰生活の統制を目指していった。それを可能とするために、新たな司牧の回路と技法が整備され、聖職者による信徒への働きかけが強まっていった。まず、社会との適合性を失いつつあった教区制に代えて、小教区制が導入されていった。さらに、新たに成立した諸托鉢修道会は、この「司牧革命」の中心的な担い手として、各地の都市で信徒たちの指導者の役割を果たすようになっていった。また、この「正統信仰」の明確化という文脈において、「正しい」キリスト教の領域と「逸脱・誤謬」の境界線が強く意識されるようになった。後期中世には、これを「識別」するための手法について学識者たちが議論を重ねていく。特に同時期に増大する神秘体験の真偽を見分けるために、パウロ書簡で言及される聖霊の恩寵「霊の識別」の定式化が希求された。本論文では、こうした司牧・規律化の諸相を追跡する中で、それに参加したアクターおよび援用される権威・正統性原理の多元性を指摘し、預言者もその一つでありえたことを示唆した。

第4章から第6章にかけては、第3章で大枠を示した司牧革命および規律化の重要な側面として、聖職位階制教会による「新しい修道生活」の制度化（第4章）、列聖を通じた「聖性」の制度化と統制（第5章）、「異端」の概念的整備および異端審問の形成過程を、それぞれ追跡した。13世紀以降の教皇権のイデオロギーは、神と人を仲介する権能を聖職位階制教会によって独占し、聖職者によって信徒たちの生活を管理・統制する志向を有していた。従来の研究は、後期中世に進む規律化や規範の構築、「逸脱・他者」の排除を、この理念の展開過程として理解してきた。それに対して、本論文では、一連の制度化が「聖職位階制と俗人・民衆・女性」や「中心と周縁」という二項対立や前者による後者の統制という図式では理解しえないことを確認した。教皇権の政策は極めて情動的かつ柔軟であり、交渉に対して開かれていた。むしろ、制度化による司牧体制の確立を求めたのは、先行研究が後者（被抑圧者）のカテゴリーに帰していた主体であった。さらに、従来の枠組が「聖職位階制教会」の名によって一元化してきた主体は理念上の存在に過ぎず、教皇権・在俗聖職者・托鉢修道会士たちは互いに異なる意図と利害を有するアクターであった。そのため、後期中世を通じて信仰生活の広範な規律化が進展し、それらが預言者崇敬にとって重要な文脈をなしたのは確かであるとしても、その実態はより複雑なものであった。

以上を踏まえ、第2部では、4人の預言者を主要な対象とする6つの事例研究を行った。

第7章では、14世紀初頭に出現した預言者ドルチーノ・ダ・ノヴァーラの権威が、エミーリア地方のアポストリ・ネットワークに浸透する経緯を検証した。イタリア半島北中部一帯に広まっていたアポストリの運動は、13世紀末になると「異端」として断罪され、創始者ゲラルド・セガレッリは1200年に火刑に処された。セガレッリに代わって運動を率いたドルチーノは、聖書釈義に基づく独自の救済史観を提示し、教会の刷新の接近を予告した。本論文では、13-14世紀転換期のボローニャ・モーデナ両司教区における異端審問記録を用いて、ドルチーノ以前から存在していたアポストリ・ネットワークの性質や広まり、ドルチーノの出現を挟んだその変質の性格、ドルチーノの教説が同地域のアポストリ支持者の間に広まる過程を検証する。

第8章では、ドルチーノと同じく「異端」として断罪された「聖人」グリエルマおよび預言者マイフレーダ・ダ・ピローヴァノの信徒たちの連帯を、その人的結合の性格および信仰実践に注目して分析した。1300年の異端審問記録によれば、審問官たちが摘発した「異端者」たちは、亡き贖罪者グリエルマが聖霊の化身であり、やがて復活して新しい教会を作ると信じていた。集団の内部では、新しい教会は女性によって指導され、マイフレーダ・ダ・ピローヴァノがその女教皇になると説かれていた。マイフレーダは、神とされたグリエルマから幻視や啓示をうけとる預言者として、周囲の信徒たちに対して「カリスマ的」権力を及ぼしていたのである。従来の研究

は、この「異端集団」の基盤が独自の霊性・教説にあると推定し、その実存に「女性的」性格や反教権主義的性格を認めてきた。それに対して本論文では、この集団の構成者を対象とする異端審問の記録を分析し、グリエルマとマイフレダを中心とした人的結合の実態を検証する。

以上の2章は、霊性・教説・思想によって本質化されてきた「異端集団」が、実際には司牧者としての預言者の個人的求心力および共通の信仰実践を中心とする緩やかな人的結合であり、その内部には多くの差異が含まれていたことを示すものである。

第9-10章では、13-14世紀転換期中部イタリア一帯で「聖性の評判」を有した女子修道院長にして預言者キアラ・ダ・モンテファルコの生涯と記憶形成を論じた。キアラについては、その死後に発見された心臓の印の奇跡がよく知られている。そのため、先行研究は、彼女の実存や彼女を通じて見えてくるとされる当時の集合的「霊性」に焦点を絞ってきた。それに対し、第9章では生前のキアラを取り巻く信徒たちおよび彼女による信仰実践に光を当てた。第7-8章の事例とは逆に多くの霊的アクターが集中するモンテファルコでは、信仰共同体同士の競合が絶え間なく続き、信仰生活が地域共同体内部の秩序に直結していた。そのため、キアラの「聖性の評判」は、故郷であるモンテファルコでは限定的であり、その神秘体験にも疑念が寄せられていた。また、周辺諸都市に散らばるキアラの崇敬者たちが彼女を中心とする一枚岩の集団を形成することではなく、崇敬サークルが複数存在していた。彼女への崇敬は身分・党派・ジェンダー横断的に広まっており、人的結合の点において、聖職者と俗人の断絶は不在であった。また、キアラは幻視・啓示に由来する霊的知解を行使し、周囲の信徒の教化や「正統と異端」の画定に従事していた。彼女を中心とする人的結合と信仰実践は、規律化の動力として機能したのである。第10章では、こうしたキアラ崇敬の生前の脆弱性を踏まえ、死の直後に描かれた伝記を分析し、彼女の記憶が整序されていく過程を明らかにした。伝記作成者ベランジェは、キアラに対して多くの批判や疑念が寄せられていることを意識し、様々な戦略を駆使している。彼は、第一に彼女の生涯を伝統的なトポスの適用によって聖人伝的枠組に回収し、第二に神秘体験と観想の結びつきを強調して前者につきまとうリスクを低下させようとした。さらに、テキスト上でも神秘体験の真偽を判断できるように、その外面化・可視化を様々なかたちで試みている。さらに『生涯』は、こうした外部からの確認それ自体の妥当性を保証し、証明の無限後退を回避するために、「信じるに値する人々」というカテゴリーに訴えている。こうしたベランジェの戦略は、預言者としてのキアラや彼女の奇跡の描写にも大きく影響した。しかし、こうした整序が規範化ではなく保証・是認を目的としていた以上、それを道具的操作と呼ぶことは適切ではない。

第11-12章では、中部イタリアの都市コルトーナで崇敬されていた預言者マルゲリータ・ダ・コルトーナの記憶の形成・利用を論じた。マルゲリータは、もともとモンテプルチャーノの貴族の愛人であったが、イエスからの啓示によって回心し、コルトーナで贖罪者となった。その経歴のため、しばしば第2のマグダラの MARIA と呼ばれる。従来の研究は、フランチェスコ会士ジュンタ・ベヴェニャーティによる彼女の『事績録』を、規律化のためのプロパガンダ手段であるとみなしてきた。すなわち、生前には自立的・逸脱的だった彼女の記憶を修道会のイデオロギーに沿って整序し、信徒たちの教育に利用可能な規範として提示しているという。それに対して第11章では、『事績録』をコルトーナの地域史内部に置き直し、その作成をコムーネ・フランチェスコ会の協働による「市民的宗教」の文脈に位置づけた。14世紀初頭のコルトーナは、政治的独立を達成したばかりであったにもかかわらず、都市共同体の霊的一体性を構築・演出しうる「市民的宗教」を持たなかった。そのため、フランチェスコ会と都市政府は、マルゲリータを都市の守護

聖人とすべく協力した。その過程で編纂・承認された彼女の『事績録』は、マルゲリータの記憶の①聖化・②市民化を通じて、生前の彼女に疑念を抱いていた人々を納得させ、守護聖人としてふさわしいイメージを提示することを目指した。ただし、修道会と都市はマルゲリータの聖遺物をめぐって競合関係にもあったため、マルゲリータの記憶は同時に③フランチェスコ会化された。また、『事績録』が編纂された時期のフランチェスコ会内部は、司牧に対する従事をめぐって動揺していた。司牧こそが修道会の使命であるとする方針は、中部イタリアの修道会士の間で全面的な支持を獲得しておらず、多くが「司牧と隠修」のあいだで態度を決めかねていた。第11章では、『事績録』がこれらの修道会士に対するメッセージを含んでいることを指摘した。『事績録』中には、主とマルゲリータの霊的会話というかたちを借りて、フランチェスコ会の救済史的使命を司牧・説教として定義し、司牧実践に関する具体的指示を与える章句が数多く含まれている。また、預言者としてのマルゲリータもまた、一連のメッセージに沿って司牧者として描かれている。これらの描写は、非制度的な権威であるはずの預言者の記憶が、司牧革命の重要な推進力にして基盤となりえたことを示している。ただし、本論文では、こうした言説空間には一定の限界が存在したことをも合わせて指摘している。

本論文の結論は、以下の通りである。第一に、イタリア半島北中部の地域社会における預言者崇敬は、地域史的な視点から見ると、在地の教会組織による司牧・秘蹟システムが動揺・機能不全の状況に陥る、ないしその求心力を低下させたことを背景に出現する。第二に、預言者を取り巻く人的結合は多元的・多重的・多中心的かつ身分横断的に成立していた。預言者に対する崇敬と敵対は、教会論的な身分やジェンダーによって定められていたわけではなく、地域社会の政治力学、そして預言者個人の求心力によって左右された。個々の崇敬サークルは既存の人的結合に基盤を有したため、しばしば崇敬者間の競合も生じた。また、その流動的な性格上、生前における「聖性の評判」は極めて脆弱であった。第三に、預言者たちの崇敬サークルの内部では、聖職位階制教会が構築しつつあった秘蹟および司牧的实践が共有・複製されていた。預言者による司牧的活動は、当時のローマ教会が構築しつつあった「正統」信仰の言語・実践のカテゴリーおよび価値観の浸透に貢献していた。本来の制度的司牧者たる聖職者たちは、こうした預言者による司牧的活動を受け入れ、その権威に従っていた。後期中世の規律化は、「制度とカリスマ」や「正統と異端」の境界線を超えて展開した過程であり、聖職者による統制・ヘゲモニー掌握という限定的な意味を超えた、多元的プロセスとして理解される。第四に、預言者たちを「聖人」として描く死後表象は、聖職位階制教会・托鉢修道会のプロパガンダ装置ではなく、あくまでも彼らの権威を前提とした記憶を提示した。表象は、一方では脆弱な崇敬を擁護・確立するための手段として、他方では預言者の記憶を利用して規律化を進行させるために構築されていた。もちろん、そこには記憶の整序を認めることはできる。しかし、そこにはなお裂け目が存在しており、そこから制度的権力とカリスマ的権力の併存が示唆される。

以上を踏まえて、本博士論文では、後期中世における司牧革命・規律化と預言者崇敬の関係を、相互排他的・対抗的な現象としてではなく、むしろ補完的・連動的なものとして提示する。預言者たちは、在俗教会の枠組における司牧・典礼体制の機能不全を補完するオプションのひとつであり、さらに自らのカリスマ的権威を利用して規律化を推進するアクターであった。実践と言説の領域において規律化と預言者崇敬は共存し、しばしば共通ないし協働するアクターによって担われていた。後期中世において進行した規律化というプロセスは、聖職位階制のイデオロギーの反映ないし聖職者のヘゲモニー確立とは程遠く、多声的かつ流動的な性格を持つものであった。

そうだとするならば、結果として現出するべき「規律化された」はずのキリスト教もまた、聖職位階制を頂点とする教会によって整序されたものではなく、あくまで共通の実践・言語によって支えられた司牧的権力の複雑な集合体としか呼べないものではなかっただろうか。